

みんなの
ための
学校長会に



学校長会HP

茨城県 学校長会広報

第261号

発行者
茨城県学校長会
会長 大芝 静香
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザ いばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

新年度に備えて 一わが校の課題— 危機管理体制の整備と学校安全の確保



目次

○表紙写真に寄せて……………	1
○(特集1) 新年度に備えて —わが校の課題—……………	2
○特別寄稿「市制二〇周年から 見えたもの」……………	5
○(特集2) 危機管理体制の整備 と学校安全の確保……………	6
○茨城県小中学校長研究協議会報告 提言二題……………	8
○課題「教師のやりがい 姿で伝えていく」……………	9
○ブロック研修会から……………	10
○梅のかおり……………	12
○ひばり……………	14
○図書案内……………	15
○市町村教育委員会と学校長会……………	16

元氣いっぱい、
笑顔いっぱい

本郷小学校

阿見・本郷小

齋藤 信一

「本郷小学校がどんな学校だったらいいますか？」全校児童にアンケートをとりました。

その結果から、みんなの目指す学校にするために、子供たちが、保護者が、学校ができることをそれぞれがまとめて一人一人が『本郷みんなのグランドデザイン』を考えました。工夫を凝らした委員会活動、行事や校外学習での実行委員、縦割り活動、全保護者参加の朝のあいさつ運動など、自分事として考える主体的な学校づくりが進んでいます。

特集1

新年度に備えて——わが校の課題——

「あたたかい学校」を目指して

小美玉・小川南中 莊司 宏征

本校は、小美玉市の南東部に位置し、稲作や野菜の栽培等が盛んな地域にある。生徒数は、二三五名で、施設隣接型の小中一貫教育に注力している。近くには全寮制の「小美玉フットボールアカデミー」があり、北は北海道、南は大阪府出身の生徒が未来の「なでしこジャパン」を目指し学校生活を送っている。課題は様々あるが、新年度は特に次の点に力を入れていきたい。

二 生徒が主役

本校は生徒会活動が伝統的に活発で、体育祭や文化祭等の行事の際、教師は企画・準備の段階から口を挟まない。自発的・自治的な活動が充実している一

一 授業力の向上

今年度は「探究的な学びの充実」を図るために、校内研修や研究授業等を実施した。さらに附属中教諭を招聘して示範授業を行ってもらった。課題解決に向けて見通しをもち、他者と協働して取り組む学習には成果が得られた。一方、自ら課題を設定する、新たな問いを見いだし



体育祭閉会式にて

方、自己有用感が低いことが課題である。互いのよさを認め合う場の設定や振り返り活動の充実によって高めていきたい。

三 地域とともにある学校

令和三年度より学校運営協議会（一五名）を小中合同で開催

児童が主体となる学校づくり

東茨城・葵小 藤井 とし子

本校は、石崎小学校、広浦小学校、長岡第二小学校の統合校として、平成二八年度に開校し、次年度、創立一〇周年を迎える。「わくわく学び、にこにこ帰る児童の育成」と「子供と向き合う時間と働きがいの両立」を組織目標として、全教職員で協働し、日々の教育活動に取り組んでいる。児童が主体となる学校づくりのためには、心理的安全性の確保が欠かせない。そこで、次の二点を新年度の課題として充実を図っていく。

一 学び合いの授業づくり

本校では、学び合いの授業づ

し、地域の皆様と小中の課題を共有して協力を仰いでいる。さらに今年度、地域学校協働活動推進員（四名）が地域・学校を繋ぐコーディネーター的役割として活動を開始した。今後、両者を両輪に据えた地域と学校の協働体制づくりが大きな課題となる。さらに、学校から地域への貢献活動を模索し、WIN-WINの関係を築いていきたい。

二 児童の活躍の場づくり

児童が活躍し認められる場をつくっていくことは、児童の自己有用感を高め、物事に挑戦する意欲、心理的安全性につながっていくと考える。そこで、学校全体で、特別活動を中心に一人一人が活躍できる場を設けていく。具体的には、係や委員会はもちろんのこと、周年事業等の学校行事においても、児童が主役となるよう意図的に仕組んでいく。事前の指導や下支えは教員も全力で行うが、本番は児童を信じて任せる。私達は挑戦の過程を見取り頑張りを認めることで、心理的安全性を確立して、児童が主体となる学校づくりを推進していきたい。



考えを聴き合う様子

地域の教育力を生かした 特色ある学校づくり

北茨城・明德小 益子 直

「よく遊び、よく学ぶ」。明德小学校の卒業生なら、だれでも知っている校訓である。この校訓は、一九六三年完成の旧校舎中央の一番高いところに大きな文字で掲げられていたが、現在の校舎にも受け継がれている。子どもたちはこの校訓を実践すべく、毎日しっかりと学習し、休み時間には楽しく校庭を走り回り遊んでいる。また、学校を支える地域の方にも浸透し、学校と地域がともに目指す学校像となっている。

一 地域と連携した学習活動

学区には、常磐炭鉱跡や岡倉天心と関係深い日本画家の飛田周山の生誕地があり、「常磐炭鉱学習会」「飛田周山学習会」として、地域の方を講師に招いて学習会を行っている。さらに、ブルーベリー農家の協力を得た「ブルーベリー栽培体験」、バスケットボールの国体茨城県代表チームの監督を歴任した方の「バスケットボール指導」などの学習活動も、年間計画に位置づけている。これらの活動は、地域の積極的な関わりから始まった経緯がある。今後も、地域的人的資源を活用して、多彩な学習活動を実践する特色ある学校

づくりを目指したい。

二 青少年健全育成市民の会学区支部との協力

本校では、青少年健全育成市民の会学区支部の会議を月一回開催しており、地域と連携した取組を行っている。和風作りの体験教室の実施や登校支援、校舎内外の環境整備など、多岐にわたり支援をいただいている。この会議では、保護者とは違った地域の視点からのアドバイスがあり、情報交換する場として、非常に大切な役割を果たしている。地域とともにある学校として、これまで以上に地域の考えを大切にしながら、歩みを進めていきたい。



和風作り体験教室

生徒も教師も 日々成長する学校を目指して

行方・玉造中 遠藤 智幸

本校は、「自立貢献」人の役に立つ喜びを実感できる生徒の育成」を教育目標とし、「生徒も教師も日々成長する学校」を合い言葉に教育活動を推進している。次年度は、今年度の成果と課題を踏まえ、次の二点を重点として取り組んでいく。

一 生徒が楽しみに待つ授業

今年度、本校では「評価からの授業改善」を共通の取組として授業改善に努めるとともに、英語科・数学科において、年間を通して習熟度別学習を実践してきた。それにより、生徒の学習状況に応じた指導が充実し、学習意欲の向上に成果をあげることができた。次年度は、生徒一人一人の学習状況をより的確に把握するとともに、習熟度別学習においては、どの場面において、どの形態で行うことが効果的かを検証し、より質の高い取組にしていきたい。また、他教科においてもそのノウハウを生かすことで教師の成長を促し、生徒が楽しみに待つ授業づくりを推進していく。

二 生徒が成長する場の創出

今年度、本校は「科学の祭典 鹿行地区大会」の会場校となった。その運営において、生徒が

活力ある学校づくりを目指して

かすみがうら・下稻吉中 嶋田 稔

ボランテアとして参加する貴重な機会をいただいた。それに関わるにあたり、自ら考え、判断し、行動することが真のボランテアであることを理解し、生徒は主体的に、求められた以上の取組をしてくれた。次年度は、現在の教育活動が生徒の成長に結びつくよう目的やねらいをより意識させるとともに、意図的・計画的に生徒が成長する場をつくるよう教育課程を見直していく。そして、「今、自分



英語科における習熟度別指導

活力ある学校づくりを目指して

本校は、かすみがうら市の中心部に位置し、全校生徒五一八名、創立四十四年の学校である。二十代、三十代の職員が大半を占め、活気あふれる職場であり、保護者、地域も学校運営に協力的である。こうした環境の中、全職員で協働し、活力ある学校を目指すため、新年度は次の取組を充実させたい。

一 若手教員の授業力向上

個別最適な学び、協働的な学びの往還を通して、「生徒全員が参加する授業づくり」をテ

たちにできることは何か」をテーマに、生徒一人一人が、人の役に立つ喜びを実感できる取組を推進し、本校教育目標の実現に向かっていきたい。

マに研究を進めている。研究では、「学習意欲の喚起」「ゆさぶり」「共有化」の三つをキーワードに授業改善に取り組んでいる。下稻吉中学校区小中一貫教育に係る教科指導法改善のための研修では、茨城大学教職大学院教授・助教の先生方を、かすみがうら市授業力向上研修会では、茨城大学教育学部附属中学校の先生を講師として招聘し、模範授業や公開授業を実施し、指導・助言をいただいた。どちらの研修も若手教員やそのクラ

スが関わっている。若手教員の授業力向上が組織活性化の鍵を握るため、今後もこうした取組を積極的に取り入れていきたい。

二 生徒指導の意識改革

反社会的なよりも非社会的な問題行動が増加し、生徒指導体制もその変化に迅速かつ柔軟に対応しなければならぬ。生徒の自己肯定感や自己有用感の育成、教師による居場所づくりや生徒同士の絆づくりを重視し、各教科や特別活動等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりや集団づくりに取り組んでいる。また、全職員が、「させる」から「支える」生徒指導に舵を切り、関係機関との連携や相談体

制の整備を図りながら、生徒が安心して学べる学校づくりに教職員一丸となり、全力で取り組んでいきたい。



教育指導法改善のための研修(英語)

子どものよさや可能性を引き出す 活力ある学校を目指して

つくばみらい・富士見ヶ丘小 岩瀬 由美子

つくばみらい市では、自ら進んで学習に取り組み、個性を発揮し、他者と協働的に活動する児童生徒の育成を目指している。これを受け、本校では、「子どものよさや可能性を引き出す活力ある学校」を目指し、次のような取組を行っている。

一 アウトプットを重視した学びの推進

今年度は探究的な学びとアウトプットを重視した学びを推進することで、主体的・対話的に自分の考えを表現できるように目指した。

授業では、単元の始めに、児童が既習事項や疑問から、「ラーニングマウンテン」と呼ばれる学習計画を自分たちで考える。

また、授業や単元の終末には、本校独自の振り返り「ふじみ」を行い、現在の自分と従来の学びを記述していく。

これら一連の取組によって、発信力が高まり、対話も深まってきたので、新年度も継続していきたい。

二 自己決定や選択の場の設定
本校の児童の課題は自己肯定感が低いことである。自己肯定

感の向上は、他者とのかわり、協働によって生まれてくるものである。今年度は児童が自己決定や選択する場を設けていくことで、自己の存在感と周囲への思いやりを実現しようと考えた。

児童代表委員会が決定した年間スローガン「自分大好き みんな大好き 笑顔いっぱい 富士見の子」は、正に本校の児童の課題を克服していこうとするものである。

十一月から行われた人権週間では、代表委員会を中心に、学級や委員会の人権について考えた。「思いやり集会」では、今までの学びを紹介し、自分や他者のよさを知り、「みんな違ってみんないい」ことを再認識した取組であった。

新年度は、年間を通して、児童会活動、クラブ活動、学級活動における自治的な活動を充実させ、自分も周りの人々も大切にでき、活力ある子どもたちを育てていきたい。



ふ・じ・みの振り返りの様子

ともに輝く児童の育成を目指して

下妻・総上小 齋藤 貴史

本校は、全校児童一一三名、創立一三五年の歴史と伝統のある学校である。温かく協力的な保護者や地域の方々に支えられ、昨年度から実施している学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を核とした地域との協働体制づくりに努めている。

今年度実施してきた「自分を表現する意欲をもち、前向きにチャレンジする児童の育成」について、成果と課題を整理し、新年度は更に充実させ、ともに輝く児童の育成に向け、全職員一丸となって取り組んでいく。

一 表現力の育成

朝の挨拶放送で、校舎内に「おはようございます」と子供たちの元気な声が響き渡り、一日が始まる。学級毎に挨拶がんばりカードを廊下に掲示するなど取組の可視化と併せて、課題であった挨拶ができる児童の育成に努めている。更に、自ら進んで気持ちを込めた挨拶を目指す。また、授業では、自分の考えや意見をきちんと伝えられるよう、ペアやグループ、ICTの活用も含め、交流活動の方法や形態、発問の工夫に努めている。

今後挨拶や自分の考えなどを声に出して伝える日常的な表現の場を充実させることにより

表現力を育んでいきたい。

二 挑戦する心の育成

小規模校の良さを生かし、異学年との交流活動や学校行事、様々な教育活動で、児童が一人一役を担い、活躍する場を設けている。また、学校支援ボランティアによる農業体験(田植え、稲刈り)・読み聞かせ・学習支援(ミシン、そろばん)、歩く会など、地域に関わり、多くの方々と触れ合う機会の充実に努めている。

これらの活動を通して、児童一人一人に達成感を味わわせ、自己有用感を高めることにより、次の活動に挑戦しようとする思いにつなげていきたい。



地域と合同で実施した歩く会

特別寄稿



市制二〇周年から見たもの

筑西市教育委員会教育長 大森 達也

本市は、平成一七年三月二八日に、下館市、関城町、明野町、協和町の四市町が合併し、筑西市が誕生しました。そして、令和七年三月二八日に、筑西市制二〇周年を迎えます。それに伴い、今年度から二年間、市制二〇周年を記念した様々なイベントが催されています。

今年度は、十月に、二〇周年記念花火大会として、アイドルマスターとのコラボ企画がありました。また、毎年十二月に実施されているマラソン大会は、二〇周年と二〇キロをかけて、筑西ハーフマラソンとして実施しました。両イベントとも、県内外からたくさんの方が参加され、盛大に行われました。

さらに、十月から十二月にかけて、「筑西市文化協議会」が主催となり、歌謡、お茶会、俳句、短歌の会、絵画や写真展等様々な発表会がありました。加えて、コミュニティセンター主催の地区文化祭や地域の自治体主催の地区運動会も行われました。私は、これらの各種イベントに参加し、地域やコミュニティのもつ力と重要性を改めて

感じました。

今から四年前、令和二年にはじまったコロナ禍。私は教育委員会を出て、校長として中学校に赴任しました。しかし、いきなりの学校閉鎖。始業式に一瞬だけ子供たちと対面しましたが、すぐに下校となり、それからしばらくは子供たちのいない学校生活となりました。四年ぶりの学校現場復帰に胸躍る気持ちでしたが、現実には全く違うものとなっていました。子供たちの登校が再開されても、全員マスク、ソーシャルディスタンス、会話の制限、学校行事等の制限や中止等、子供たちには様々な我慢を強いる日々が続きました。また、学校ばかりでなく、地域の集まりや行事も減少しました。そういった中、子供たちを見るたびに、この子供たちの心はいつまでもつのだろう、この子供たちは将来どうなってしまうのだろうか、そんなことばかり考えていたことを思い出します。

あれから四年が経ち、少しずつコロナ禍以前に戻ってはきたものの、少子高齢化や人口減少

が加速度的に進み、人とのつながりが希薄になり、孤独感や閉塞感、将来への不安等を抱く人が年々増えてきているのではないのでしょうか。併せて、不登校児童生徒の増加も気になると思います。

そして迎えた今年度の秋。私は、筑西市の数多くのイベントに参加させていただきました。そこでは、幼い子から高齢者まであらゆる世代が集い、明るい笑顔と元氣な声が飛び交っていました。私には、そこにいる人たちが、人とのつながりを喜び、地域に守られているという安心感に包まれているように感じられました。小中学生も数多く参加し、地域の方々に感謝されたり頼られたりしながら満面の笑みを浮かべて活動していました。子供たちは、こういった経験を積み重ね、地域とともに生きていくために頑張る人になつてくれるのでしょうか。市制二〇周年の様々なイベントから、地域とともに成長する学校の在り方が見えたように思います。

人間力の育成と「わかる喜び」

を目指して

常総・飯沼小 吉澤 博之

創立一三四四年を迎えた本校は、常総市の北西部に位置する、全校児童二〇一名の歴史と伝統ある学校である。「人間性豊かで、心身ともにたくましく、主体的に行動できる児童の育成」の学校教育目標のもと、児童、教職員、保護者、地域の人々の相互のつながりを大切にした教育活動を行っている。今年度を振り返り、新年度は次の二つを重点として取り組んでいく。

一 社会に生きる人間力の育成を目指した学校づくり

本校では、学校経営の一つの柱に、社会に必要な「人間力」の育成を掲げている。人間力が基盤となり、確かな学力の定着につながるかと捉えている。様々な人間力の中で、新年度は、児童の実態から「コミュニケーション力」と「実践力」の育成に力を注ぐ。コミュニケーション力の育成のために、なかよし集会や人権集会などの全校集会や、通学班会議や縦割り班会議などの異学年交流を行う。これらを通して、共感的理解力、受容力、プレゼンテーション力などのコミュニケーション力を育成する。実践力の育成のためには、遠足や校外学習、学級活動等で、可能な限り自己決定の場や

グループ活動を取り入れる。それにより、リーダーシップや行動力などの実践力の育成を図っていく。

二 わかる喜びを大切にしたい学びの充実

本校の課題の一つに、基礎となる学力の定着が挙げられる。課題の解決のために、授業スタイルの改善と確立、ICTを効果的に活用した探究的な学びの深化、プログラミング的思考を育むためのプログラミング教育や日本語指導の充実を進める。新年度も、児童が生き生きと学び、安心して学校生活を送れるよう、全職員が一体となって歩みを進めていきたい。



6年生から1年生へのタブレット利用のオリエンテーション

特集2

危機管理体制の整備と学校安全の確保

関係機関と連携した安全教育

笠間・笠間中 野沢 宗嗣

学校へは日々地域から様々な情報が寄せられる。「中学生が自転車と並進していて危ない」という交通安全に関するものが多いが、十一月には、「中学生が数人集まってスマホで闇バイトのサイトにアクセスしようかと相談していた」というものまであった。生徒の周囲には様々な危険が潜んでいて、それらから守るためには生徒自身の意識を高めることが第一である。そのためには学校だけでなく、関係機関と連携することが効果的である。以下、今年度、本校で取り組んだ主なものを紹介する。

○ スタントマンによる自転車交通安全教室

例年は新入生向けに自転車の乗り方教室を行っているが、今年度は笠間警察署の推薦を受けて茨城県交通安全対策会議とJA共済が共催するスタントマンを活用した自転車交通安全教室を全校で実施した。進行役の説明はとても分かりやすく、自転車交通事故の再現は大きな音もして大迫力だった。生徒たちは自転車も車両であり、自分たち



闇バイト防止のための講演会の様子

は、被害者にも加害者にもなり得ることを再認識した。また、自分の身を守るためには何よりもヘルメットをかぶることが大切であることを「かぶろうヘルメット 守ろう未来」の合言葉と共に心に刻むことができた。

○ 闇バイト防止講演会

今年の十一月は、闇バイトのニュースが巷にあふれた。中でも、茨城県の中学生在が関わった事件は、衝撃的だった。笠間市教育委員会は、いち早く笠間警

察署と連携し、市内全中学校で闇バイト防止のための講演会を企画してくれた。本校では十一月七日に、笠間警察署の生活安全課長が全校生徒を対象に体育館で講演した。闇バイトは、安全な仕事を装って誘ってくるこ

こどもの安全を守る
幼小中連携の取組

銚田・銚田北中 本城 知子

一 はじめに

本校は生徒数一九三名の小規模校である。周囲は畑が広がり、のどかな農村地域に位置している。本校は、学区が広く、六キロメートル以上の遠距離を通学している生徒もいる。地域の方は学校教育に関心が高く、地域全体であたたかく生徒を見守ってくださっている。

また、本校は幼稚園と小学校が隣接しており、年に数回、中学校から生徒が読み聞かせに伺ったり、運動会のボランティアを行ったりするなど、幼児・児童との交流を深めている。今年度から小学校と合同のコミュニケーションスクールがスタートし、熟議を重ねているところである。

とや高額のバイト代が書かれていても一円も支払ってもらえないこと、応募してしまうと家族に危害を加えるなどと脅しを受けて途中でやめづらいなど、とても分かりやすい内容であった。闇バイトのニュースが連日流れる中での講演だったので、より効果的であると感じた。

安全に関しては、生徒指導主事等が話をすることが多いが、今後も外部の専門家等を効果的に活用していきたい。

二 幼小中合同引渡し訓練の実施

有事の際に、幼児・児童・生徒の安全確保と保護者への速やかな引渡しができるように、年に一回「幼小中合同引渡し訓練」を実施している。

幼稚園や小学校に弟妹がいる生徒たちは、避難場所を別に設け、保護者の迎えを待つようにした。また、迎えの車の乗り入れを一方にしたり、駐車場を学校外に確保したりすることで保護者も引渡しの動線を確認することができた。幼小中の保健主事を中心に打合せを綿密に行い、全職員で役割を分担した。保護者にも事前に通知することで、渋滞や混乱をきたすことなくスムーズに引渡しを行うこと

ができるようになった。
三 PTA幼小中合同危険箇所点検

夏季休業前に、小中合同のPTA校外指導委員会を開催した。通学路の危険箇所を洗い出し、市教委に報告した。また、「一〇番の家」の看板設置等も合同で実施している。

四 幼小中合同救命基礎講習（心肺蘇生法）の実施

夏季休業中、銚田消防署員を講師に招き、幼小中合同で職員研修を行った。AEDの使い方や胸骨圧迫の方法を実習することで、救命救急法について改めて確認した。

五 おわりに

今後も、保護者やコミュニケーションスクール等、地域の方の協力をいただきながら幼小中連携を一層深め、幼児・児童・生徒の安全確保に努めていきたい。



幼小中合同引渡し訓練の様子

学校・地域の実態に則した 危機管理体制の見直しと再構築

稲敷・あずま東小 二宮 隆二

一 はじめに

本校は、稲敷市の最も東部に位置する児童数二〇〇名の小規模校である。これまでに二つの小学校と統合しており、学区は広範囲にわたる。校舎は、南に利根川、北に霞ヶ浦のある低地に建っており、ハザードマップでも、水害時の防災対策が必須な学校であることが分かる。

二 危機管理体制の見直し

赴任後すぐに、危機管理マニュアルを確認するとともに、学区を巡視し、地域の状況を確認した。とにかく学区が広く、河川氾濫等の水害時に全児童を引き渡して避難させることは、相当難しいと思われた。また、高台に位置する避難場所までは、五・三キロメートルの距離があり、児童を連れて徒歩で避難することも不可能と思われた。

三 危機管理体制の再構築

現状把握後、体制を再構築するにあたり、宮城県の「震災遺構 中浜小学校」へ赴き、情報収集を行った。津波被災当時の校長先生がガイドを務めており、リアルな情報を収集することができた。特に、高台への避難ではなく、校舎屋上への垂直

避難を決断した理由や職員が水につかりながら、体育館へ物資を取りに行ったことなどは、大変参考となる情報であった。情報をもとに自校の危機管理マニュアルを改定し、警報が発出された場合はすぐに、児童を三階へ垂直避難させ、防災倉庫の物資をダムウェイターを使って三階へ移動する等の対応を追加した。防災倉庫内の物資の確認も行った。食料や飲料水は十分であったが、防寒用の毛布の数が足りない可能性があり、市役所危機管理課に相談し、追加していただいた。



防災倉庫内の物資確認の様子

今後、改定した危機管理マニュアルに基づき、児童と教職員の防災訓練を実施する予定である。また、改訂したマニュアルの内容や訓練を実施しての課題等を学校運営協議会で情報共有する予定である。地域の状況を踏まえた意見や要望等を取り入れて、さらに実効性の高い危機管理マニュアルの作成や防災

地域と連携した「防災教育」 「交通安全」の推進

坂東・岩井二小 小川 裕貴

一 はじめに

本校は、坂東市の市街地に位置し、児童数四五七名の中規模校である。学区には複数の商業施設が立ち並び、また、以前から暮らす日本人と、近年増加傾向にある外国人も居住し、共存共栄、活気があり国際色豊かな地域でもある。今年度は、岩井第二地区、第二分館、岩井第二交通安全母の会、坂東市社会福祉協議会等との連携を図り、地域ぐるみで「防災教育」や「交通安全」等に取り組んでいる。

二 防災教育への取組

まず学校では、危機管理マニュアルの作成、計画的な避難訓練の実施、防災に関する職員研修等が挙げられる。中でも、職員研修においては、授業中、地震で避難を誘導すべきわれわれ教職員(担任・授業者等)が被

訓練の実施に役立てていこうと思ふ。

四 終わりに

子供たちの命を預かる学校にとって、危機管理に完全はない。これからも、児童と教職員の命を守るため、保護者や地域と協働し、より実効性のある危機管理の取組に努めていきたい。

災・負傷して動くことができない、子供たちのみで避難させざるを得ない状況を想定し、普段からどのような声かけ(指導)が必要かを考える実践的な内容を盛り込んだ。

次に地域との連携では、広報誌いわい第二「わたしのあした」を各戸配付したり、岩井第二分館主催「防災に関する講話」や坂東市社会福祉協議会主催「命を守る防災術」に参加したりして連携を図り、研修を積んでいる。最後に、これら計画的・系統

の実践をとおして、坂東市教委発行の危機管理マニュアルや第二地区防災計画等を参考に、本校危機管理マニュアルを作成している。

三 交通安全への取組

まず学校では、通学班を編成しての登下校、PTAによる危

険箇所の点検、教職員による常時の交通安全指導等が挙げられる。

次に地域との連携では、岩井第二分館、岩井第二小地区ウォーキングパトロール隊、坂東市更生保護女性会、岩井第二交通安全母の会等と連携し、日々児童の安全確保や危険箇所点検(把握)等を行っている。

最後に、各団体各構成員の方々から寄せられた貴重な情報をとりまとめ、「交通安全」のために、必要に応じて関係各所に相談し、状況改善に努めている。

四 おわりに

子供たちが、毎日元気に安心して、安全に学校生活を送る裏側には、地域の方々の子供たちへの思いや理解、協力・支援がある。たくさんの人々や組織に支持されていることに感謝したい。



交通安全母の会主催 交通安全教室4年生の様子

令和六年度茨城県 小中学校長研究協議会

企画実行委員長

水戸市立城東小学校長

伴 早苗

令和六年度茨城県小中学校長研究協議会が令和六年九月一日（火）から一二日（金）の四日間、開催されました。小中学校部会は教育プラザいばらきを会場に、参集型で、中学校部会はオンライン型で開催しました。

今年度の協議テーマは、県校長会の第四期中期教育ビジョンの視点一及び視点二から決定しました。小中学校部会は、視点二の学校の取組「教職員の『人材』育成」の重点である「教職員一人一人との対話に基づくキャリアステージに応じた研修の奨励」を基に、「研修のあり方」教職員一人一人との対話を通して「〜」としました。

中学校部会では、視点一の行政との連携「『人材』育成のための働きかけ」の重点である「管理職（スクールリーダー）育成のための連携強化」をテーマとしました。

協議グループは、他市町村での取組などの情報交換ができるよう五ブロックが偏ることのないように配慮しました。協議では、各地区、各校の取組や課題等を出し合い、活発かつ和やかに協議が進行しました。

協議会終了後、総務委員がアンケートを実施しました。参加者全員から回答があり、協議会

の感想や課題、改善策等多くの意見をいただくことができました。アンケートから、成果としては、次の四点が挙げられました。

- ①各市町村、各学校の取組事例（研修、管理職に向けた人材育成、不登校、特別支援、部活動地域移行等）を知ることができた。今後の学校経営に生かしていきたい。
- ②参集して（小中学校部会四名でのグループ協議だったので、十分時間をかけて話し合うことができた。
- ③校長会と行政との連携をキーワードにした協議は、引き続きテーマとしてほしい。
- ④参集型（小中学校部会、オンライン型（中学校部会）共に、それぞれの良さを生かしながら協議テーマについて深まりや共有することができた課題としては、次の四点が挙げられました。

①協議内容の明確化と司会役との事前打ち合わせが必要だと感じた。

②オンライン型のデメリットを感じた。参集型と比較すると協議の深まりに乏しいと感じた。

③会場までの道のりを考えると、参集型の良さは理解できるが、オンライン型の協議でもよいのではないか。

④義務教育学校は、小中学校部

会に所属するのではなく、義務教育学校部会としてほしい。

成果と課題から次年度の開催内容について考察しました。

○実施日、期間及び協議時間については、今年度同様とする。

○開催方法は、参集型とオンライン型それぞれのメリット、デメリットを考慮し、小中学校部会と中学校部会が隔年で実施する。

○協議会は、一グループ四名程度とし、五ブロックが偏ることが無いようにする。参集型の場合は、司会者は事前に指名せず、協議会の際に互選で決定する。オンライン型では、欠席連絡や協議会の世話役となる連絡係を事前に一名事務局より指名する。

○義務教育学校及び小中一貫校においては、原則、県校長会で決定している小中学校部会の通り参加する。ただし、他の部会に参加希望がある場合は、その限りではない。

令和七年度県校長会小中学校長研究協議会は、令和七年九月九日（火）から一二日（金）の四日間の開催となる予定です。

お忙しい中、協議会に出席くださいました会員の皆様方並びに各ブロックの企画委員の皆様方のご協力に感謝申し上げます。



提言二題

地元産業の理解と食育

神栖市PTA連絡協議会

会長 飯田 等



茨城県の最南端「神栖市」で本年度神栖市PTA連絡協議会会長を承りました飯田等です。各校の校長先生を始めとする諸先生方には、日頃より児童生徒の指導はもうろん、PTA活動にご協力とご参加をいただき、誠にありがとうございます。この場をお借り致しまして感謝申し上げます。

さて、私は本年度会長として本業である農業の理解と食育を始めとして、地域産業をもっと皆さんに知って頂きたいと思っています。どの業界も人手不足の中、第一次産業は深刻な状態です。少し農産物の物価が上昇すると、報道で値段が高いと取り上げられます。最近の気候変動で、日本の四季に変化がみられ、季節外れの暑さと寒さが入り交じる状況で安定した農作物の栽培は不安視されています。そのような中、我々がどんな思いで農産物を栽培して皆さんに

届けているのかを知ってほしいと強い思いでいっぱいです。

各学校では食育を推進されていると思います。児童生徒が幼い時から土に触れ自分達の食べ、健康な体づくりのために必要なエネルギー源になっていることを学んだりすることは非常に重要であると考えています。

地域産業は神栖市の大きな財産であり、将来の働く場所や地域との関わりが今後、益々重要になると考えています。私の想いを保護者と先生方に理解して頂ければ幸いです。これからの地域産業の発展には人材の確保と育成が求められます。神栖市で育った児童生徒が郷土に誇りをもち、地域産業を担う大人へと成長してほしいと強く願っています。

最後に、少子高齢化や働き方改革、教育の新しい指導方法など、急速に時代が変化しています。将来、児童生徒が幸せな人生を送れるように、保護者として、時代の変化に合わせて対応していかなければなりません。PTAでは必要な情報を共有し、児童生徒の学校生活を楽しく実りあるものにできるように先生方と力を合わせていきたいと思っています。どうぞこれからも宜しくお願い致します。

「学校と子供たちの応援団」 として持続可能な運営を

守谷市小・中学校
PTA連絡協議会

会長 吉田 あゆみ



令和六年度、守谷市小・中学校PTA連絡協議会会長を務めさせていただいております吉田あゆみと申します。各校の校長先生をはじめとする諸先生方には、目まぐるしく変化していく時代の中で教育や指導に多大なご尽力を賜り、この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、私は第一子入学と同時に黒内小学校PTA会長職を引き受け今季五年目となりました。コロナ禍で始まった一年目、行事も出来ないなかでPTAとして何が出来るかとたくさんさんの情報を収集しました。その年は前例踏襲の状態運営を行っていましたが、色々な方から話を聞いていくうちに「出来るときに、出来る事を、出来る人で」活動していくこと、子供たちがその姿を見て「楽しいんだ」と感じてもらえるように「やるからには楽しく」活動出来ること、そして保護者自身が本校の最大目標としている「学校と子供たちの応援団！」になれる活動をしていくべきではないかという結論に辿り着きました。

誰のための活動なのかを考えて直し、学校や子供たちが困っている事にフォーカスした結果、本校では役員募集は本部役員のみ、それも人数は設定せず集まったメンバーで運営をし、その他は手上げ制のその都度募集に少しずつ切り替えていきました。それも親しみを持っていただけという「黒内サポーター」通称「黒サポ」と愛称をつけ参加しやすい雰囲気を作っています。

学校が求めていることとPTAがやろうとしていることをしっかりと合致させていきながら、本部役員のメンバーが誰になっても、先生方が入れ替わっても運営していける仕組み作りがこれからの課題となっております。

嬉しい事に市内でも本校の仕組みを導入する学校が出てまいりました。しかしながら、学校や地域によって特性があり、全ての学校に本校の仕組みがマッチするとは限りません。この仕組みがその学校の特性に合わせたオリジナルのカスタマイズしていきけるよう市P連会長としてサポートしていくことがこれからの目標でもあります。

最後になりましたが、私個人が陰ながら掲げている目標は、先生方が異動される際に「黒内小に勤務出来てよかった。守谷市で働くことが出来てよかった」と思っていただけのように、私自身が明るく楽しく活動してまいりたいと思う所存です。

課 題



教師のやりがい 姿で伝えていく

県学校長会副会長 石塚 浩司
(古河・三和中)

五年毎に策定され、令和五年度から九年度までの我が国の教育政策全体の方向性や目標、施策等を定めた「第四期教育振興基本計画」では、①持続可能な社会の担い手の育成、②日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上の二つをコンセプトに掲げ、実現を目指すため、五つの基本的な方針を示している。中でも、学校における働き方改革や処遇改善、指導・運営体制の一体的推進、教師の養成・採用・研修の一体的改革等の内容が、各学校で抱える課題と大きく関連している。これらは、本県学校長会が進める第四期中期教育ビジョンの二年次として「次世代を担う『人財』を育成し、新しい時代の学校教育を推進する」において、スクールリーダーの育成及び教職員の研修の充実を図る取組にも通ずるものである。

向上させ、子供たちの教育のために優れた教師を確保するため、次の内容が記され、今後、一体的かつ総合的に推進するとしている。

①校務DX加速化、勤務間インターバルの推進、スクールロイヤー等の体制構築、学校における働き方改革の更なる加速化

②新卒教師は学級担任ではなく教科担任としたり、持ち時数を軽減したりするための教科担任制充実に向けた定数改善等、学校の指導・運営体制の充実

③高度専門職である教師の職務の重要性を踏まえた教師の処遇改善

我が国の学校教育には、時代の進展に伴う多様な教育課題への対応が求められてきた。例えば、食生活をめぐる環境が変化し、肥満や生活習慣病の増加、食の安全等の問題が顕在化したため、平成一七年に食育基本法が制定され、基本的施策に学校における食育の推進が位置付けられ、教育活動全体を通じて食育の指導が求められた。また、

情報化の進展に伴い、情報手段を適切に活用する能力や態度の育成が求められる、平成二〇年告示の学習指導要領総則において、「情報モラルを身に付けるための学習活動を充実すること」等の内容が位置付けられた。

キャリア教育、法教育等も同様であり、時代の進展に伴う教育課題として社会的な要請が生まれ、学習指導要領に関連する内容が位置付けられたり、既に位置付けられている内容に関連させたりして実践することが求められてきた。各学校では、基本的な考え方を整理して効果的・効率的な教育課程を編成し、児童・生徒に「育てたい資質・能力」を明確にして実践し、成果をあげてきた。

日本の学校の先生は、優秀であると常々感じている。しかし、子供たちのためにと頑張りすぎることで、伝統・前例の多くは見直せるものが多いこと等の改善の余地もある。

教員不足解消や働き方改革の特効薬はない。今できることは教員である我々が瞳を輝かせ、教職のやりがいを姿で伝えていくこと、改善できることを行動に移していくことであると思う。「教師に向いているよ」と、生徒の心に火をともし、人生を変える種となる未来への一言を、ともに引き続きしてほしいと願っている。

ブロック研修会から

新しい時代を拓く、
心豊かな日本人の育成

水戸・見川中
水越 達也

今年度の中央ブロック校長研修会は、十月三〇日(水)教育プラザいばらきを会場に一六四名の参加で実施された。講演会形式により、音楽マネジメントを行う株式会社AMATIの社長である入山功一様を講師に迎え「組織を育て、ひとを育てるマネジメント」の演題でご講演いただいた。

入山氏は、大学在学中より音楽事務所のスタッフとして活動し、一五年ほど前に独立して現在の会社を設立し、意欲的に様々な音楽に関する企画を主催している。また、日本クラシック音楽事業協会会長として、コロナ禍で自粛要請が出た業界をどう維持していくか腐心し、音楽界の代表として行政に働きかけた方でもある。例年異業種の方からの講演をという事後アンケートが多く、今年は音楽業界でのお話をいただいた。

講演では、マネジメントで心

教育プラザいばらきの皆様、合わせて参加された校長先生方に心より感謝申し上げます。

新たな時代を拓く、創意と
工夫に満ちた学校経営

北茨城・磯原中
滝 人司

掛けている、スケジュールを組む(守り)営業活動により仕事を得的(攻め)アーティストの相談役になる(監督)ということや、若手職員との付き合い方では、仕事として好きなことをするには何かを犠牲にするしかない事も伝えていくことが大切とのお話があった。

また、コロナ禍での音楽活動再開のため、ウィルス飛散状況のシミュレーションを行い、ガイドラインを作成したお話も興味深く聞くことができた。

結びに、開催にあたりご協力をいただきました中央ブロック評議員・研究推進委員の皆様、



講師紹介を受ける入山先生

今年度の県北ブロック学校長研究協議会は、十月一六日(水)日立市ゆうゆう十王Jホールを会場に、講師として、株式会社イデアラボより、代表取締役の澤井大樹様、同リサーチディレクター 原田悦子様、来賓として、茨城県県北教育事務所長河原井信幸様をお迎えして、研究テーマ「新たな時代を拓く、創意と工夫に満ちた学校経営」のもと開催しました。

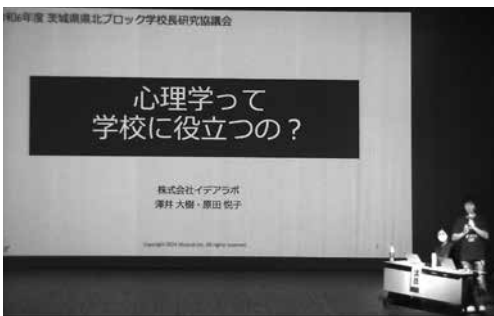
講師のお二人が所属する株式会社イデアラボは、「人の心を『科学』する」をキャッチフレーズに掲げて企業向けコンサルティング業務を展開する会社です。心理学の研究者でもあるお二人から、「心理学って学校に役立つの?」という興味深い切り口の演題でご講演いただきました。

まず、澤井大樹様より、心理学を生かしたエビデンスに基づいて課題解決のための対策や計

画を立て実践することの意義についてお話をいただきました。続いて、原田悦子様より、認知工学(認知心理学、認知科学)の視点から生活・学習場面の環境のデザインを考え、学校のDXの取組について、その意味を問い直し、考察するお話をいただきました。

参加者のアンケートには、「情報機器を使うことが情報化ではない、ユーザー視点からのフィードバックが必須である、という言葉が心に残った。」「心理学の知見に基づいて効果的に改善策を立てるというお話を学校経営に生かしたい。」との感想が多数寄せられ、心理学から学校経営を見直す意義と可能性を大いに感じました。

結びに、本研修会を開催する



澤井氏と原田氏による講演の様子

に当たり献身的にご準備いただいた日立市学校長会の皆様、心より感謝申し上げます。

新たな時代を切り拓く学校経営
組織マネジメントによる人材育成

鉦田・鉦田北小
田口 雅偉

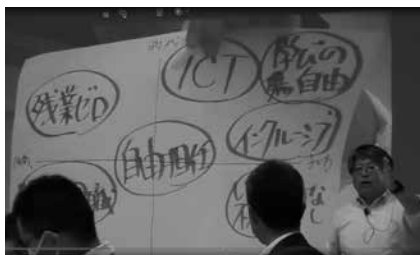
令和六年度県東ブロック校長研修会は、標記のテーマのもと、八月一日(木)に鹿行生涯学習センターを会場として、茨城県鹿行教育事務所長小沼千秋先生を来賓にお招きし開催された。

研修は、元全連小会長で国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科教授の喜名朝博先生を講師としてお迎えした。

学びに向かう児童生徒を育成していく中で、校長も自ら学び続ける姿勢が大切であることから、参加者が主体的に関わるワークショップ型の研修となった。

研修テーマから「新たな時代とは」「組織マネジメントとは」「人材育成とは」の三つの問いが喜名先生から投げかけられ、グループでの協議や全体で共有する形式で研修が進められた。

喜名先生からは「これからの学校の条件」として、①指導観の



喜名先生からグループへの問いかけ「新たな時代」の学校とは、どんな学校だと考えるかをファシリテーターを中心にグループでまとめた。画面に映し出されたものは、代表グループ作成のもので発表直前の様子

転換、②多様性の重視、③体質改善について解説があった。また「組織マネジメントを考えるヒント」としては、学校経営は学校改善であり、経営は日々の課題解決の連続性で行っていくものであるとし、学校教育目標の具現化のためには校長のマネジメント力やリーダーシップについて語られた。最後の「人財育成」については、教員の育成も児童生徒と同様に個別最適な学びと協働的な学びの中で育成されていくことの必要性が述べられた。

喜名先生の人柄が伝わり、終始和やかな雰囲気で行進が進められた。この研修内容が今後、校長の学校経営の糧になるとともに、ミドルリーダーはもちろん若手に広がっていくことを期待したい。

子どもたちのハピネスのために

つくば・春日学園
根本 智

今年度の県南ブロック校長会研修会は、八月三日（金）に、つくば市にある市民ホールくきぎで開催されました。

講師の先生に元ディズニールンド運営部長の安孫子薫様をお招きし、「ディズニールンドの現場力」すべてはゲストのHAPPINESSのために」という演題でご講演をいただきました。

安孫子様の講演では、現場で行動しているキャストのモチベーションを上げることがゲストの幸せにつながる、ということとを教えてくださいました。ご存じのとおりディズニールンドではお客様をゲスト、従業員をキャストと呼んでいます。ゲストを子どもたちに、キャストを先生方に置き換えることで学校ごとと捉えられ、先生方のモチベーションを高めることが子どもたちの自己存在感や幸せを高めることができます。と心に刻むことができました。

また、キャストのモチベーションを高めるためには、ピ



公演中の安孫子先生

ジョンの明確化だけでなく一人一人のミッションの明確化、さらには行動規範の明確化が重要であるとのことであり、学校経営においても、教員一人一人に対しての丁寧なバックアップの重要性を改めて認識させていただきました。今後、私たち校長はスクーラーリーダーとして、先生方に対して人として対等に接するとともに、心理的安全性の高い職場環境を整えることで、子どもたちにとってハピネスが溢れる学校づくりを進めていくという道標をいただくことができました。

結びに、開催にあたりましてご協力をいただきました、県南ブロック協議会の校長先生方に、心より感謝申し上げます。

次世代を担う「人財」を育成し、新しい時代の学校を推進する

結城・城西小
横倉 政宏

今年度の県西ブロック校長会研修会は、十月二日（水）に県西生涯学習センターを会場として全員参加型で行いました。来賓として、県西地区市町教育長代表の中山均様、茨城県県西教育事務所長の木村教人様のご臨席を賜りました。講師として、トモエ乳業株式会社代表取締役社長の中田俊之様に「理念経営と人財育成」温故知新」という演題でご講演をいただきました。

中田社長は、医師としての白衣を脱ぎ、乳業会社の社長としての人生とその歴史についてお話になりました。実の父親である先代の社長の思いを引き継ぎ、新しい理念経営を取り入れた会社経営は、学校経営にも大変参考になる内容でした。

中田社長の経営信条として、「乳業の川上から川下、そして地域に貢献します。会社員が家族です。」トモエスピリッツとして、「使命に対して誠実に、愛情をもって取り組みます。」というお話がありました。また、安



全校長参加型で行われた講演会

全で安心な牛乳・乳製品を通して社会に貢献していこうとする考え方など、児童生徒を第一に考え、保護者や地域の声に耳を傾けるとともに、職員を大切にすることを意識した学校経営の基本に大きな示唆をいただきました。参加者一同、中田社長の社員に対する深い愛情と会社経営に対する熱い思いを受け取ることができました。

結びに、開催にあたりご協力を頂きました講師の中田社長をはじめ打合せ段階から関わっていただいたトモエ乳業の皆様、来賓の皆様、県西地区校長会連絡協議会評議員・研究委員の皆様、合わせて参加された校長先生方に心より感謝申し上げます。

梅のかおり

—先輩校長から—



退職して思うこと



前・東海村立
白方小学校長
仁田 稔

昨年度末に退職し、間もなく一年が過ぎます。昨年の今頃は、自分の教員人生がどのようなものだったのかをよく考えていました。これまで、その時その場で考え判断してきたことが、それでよかったのか。子ども達へもつとちがったアプローチがあったのではないかなどと、様々な場面が脳裏に浮かんでいては、自分を振り返っていました。その時はそれが最善だと信じていたことも、時が過ぎればまた違った見方・考え方になるのだと感じています。

現職時は、急速で激しい社会の変化に対応することに追われて感じるの、様々なしがらみ

から離れ日々余裕のあるのんびりとした毎日が流れていくことです。難しいことは考えず、今までできなかったことをゆつくりやっつけていく時間はたつぷりあると思うと心も穏やかに人生の過ごし方を見つめることができていると思います。現職の時には想像もできなかったことです。この時間を大切にしていこうと思います。

創造的な力を育む



立長
町小学校
前・大子
袋田小学校
菊池 弘

定年退職後、茨城県埋蔵文化財センター（いせきびあ茨城）に再任用職員として勤務しています。茨城県内の発掘調査で出土した縄文土器や弥生土器などの埋蔵文化財を展示している施設です。センターの業務の一つに、県内の小学校などに出向いて体験学習を行う「出前講座」があります。これは、子どもたちに茨城県の歴史・文化を知ってもらい、関心を深めてもらうことを目的に行っているものです。

どの学校に伺っても、子どもたちは本物の縄文土器や土偶、弥生土器などに触れると感嘆の声を上げます。火起こしや勾玉づくりなどの体験では、時間を忘れて夢中になって取り組んでいます。

学校の授業で、ただ教科書の内容を覚えるだけではなく、過去の遺跡や遺物を通じて、私たちの文化や歴史を実感できる機会を提供することはとても大切です。歴史を深く理解することで、未来に向けてより広い視野をもつことができます。

子どもたちに「なぜ」と問い続けることを促し、自由な探究心をもたせ、問題解決の過程を楽しんでもらうことが、将来の創造的な力を育むことに繋がると信じ、学校現場に伺っています。皆様の学校でも、ぜひご活用ください。

日々、学び合い



立長
市立萩小学校
前・東小
國井 春美

令和六年三月末日、多くの方々に支えられ、三七年間の教員生活を無事に終えることができました。

在職中、グラウンドデザインに「大人も子供も学び合う学校」を掲げてきた。子供たちには、「友

達と共に学び合い、心も体も大きく成長してほしい」と話してきた。先生方には、目の前の子供との積極的な関わりや、同僚の先生から、たくさんのお話を学び合ってほしいと伝えてきた。先生方は、子供から、相互授業参観や、放課後の職員室での会話から、積極的に「学び合い」を実践してくれた。

特に、放課後、若手教員主導で行われた「ICTミニ研修会」は授業の幅が大きく広がる、充実した学び合いの時間であった。生き生きと講師を務める若手教員の背中が大きく、頼もしく見えた。

「厳しい声から学ぶ」ことも多かった。保護者や地域の方の厳しい声は、保護者や地域の強い思いや願いであることに気付かされ、貴重な学びの時間となった。

「学び合う」ことに大人も子供もなない。校長として出した結論だ。

現在は、週四日再任用として勤務している。立場が変わると、今まで見ていたものが変わった景色に見え、とても新鮮だ。立場が変わっても、多くの方々から教えられ、育てられ、私の「学び合い」は今日も続き、それを楽しんでいる。



「やる気」フェーダー



前・銚田市立
銚田南中学校長
関根 康裕

フェーダーはおわかりでしょうか。放送室のメインの機器は、ツマミを縦にスライドして調整します。あれがフェーダーです。「やる気」はスイッチではなく、可変するものだと思うのです。

校長在職時、最大が10だとするとフェーダーは常に10でした。休日でも8ぐらいにしか下げられず、スマホの着信をいつも気にして生活していました。

役職定年で退職し定年前再任用として週四日、義務教育課で働いています。スマホも鳴らなくなりしました。フェーダーは仕事をしていた6ぐらいです。（手を抜いているわけではありません。気持ちの問題です。）

家にいるときのフェーダーはおそらく3ぐらい。お盆には、コロナに初感染し、貴重な十連休を療養で（無駄に）消化しました。さらには、家族から「最近またもらない話が多い」との指摘を受け、フェーダーが下がりました。

このままではいけないと、一時習慣だった「写経」と「散歩」を

再開させるとともに、読書はできるだけ「新書」を手にするようにしました。これでは集中力と体力の維持向上、さらには新たな知識の注入を目指します。健康で充実した「第二の人生」にしたものです。

新たなスタート



前・かすみがうら市立
下稲吉中学校校長
福島 真

今年度から定年退職が一年ずつ伸びる最初の年に定年前退職し、四月一日から、かすみがうら市教育委員会の生涯学習課に週五日勤務で新たなスタートを切りました。

仕事内容は、市内小・中・義務教育学校と市内連携企業との調整、部活動の地域移行（地域展開）、コミュニティ・スクールの導入です。これまで長年勤めていた学校の仕事とは違い、戸惑いはありましたが、同じ職場の同僚に支えられ、近隣市町村とも情報を共有して、仕事を進めてきました。また、退職して学校現場を離れ、学校の様子を見てみると毎日が忙しく大変だと改めて感じました。その忙しい学校の手助けに少しでもなればとの思いもあり、各学校と連絡調整しながら、部活動の地域移行とコミュニティ・ス

クール導入の準備を進めてきました。現在、部活動の地域移行は九月から五団体を実証事業としてスタートすることができました。また、コミュニティ・スクールも霞ヶ浦中学校区をモデル校に学校運営協議会推進委員会がスタートし、来年度の本格的実施に向け進めています。今までもお世話になった先生方に少しでも恩返しできればと思います、今の仕事に全力で取り組んでいるところです。

挑戦し続ける：



前・つくばみらい市立
小絹中学校校長
栗原 繁則

定年退職して一年半が過ぎました。私は現在つくばみらい市総合教育支援センターに勤務しています。センターについて紹介します。総合教育支援センターは令和五年十月に、閉校した旧十和小学校に移転し開所しました。相談員四名、支援員四名、SC一名、用務員一名の一名で運営しています。移転する前の施設に比べ、支援環境が大きく変わりました。子どもたちを支援する教室は、小学生と中学生に分けることができ、個別の学習室も六つの部屋を活用でき、体育館や校庭、特別教室もあります。子どもたちの笑顔

も多くなり、通室してくる児童生徒も倍増しました。

現職の時に生徒にも職員にも自身を成長させるために「挑戦」することの大切さを折に触れて話していました。もちろん自分も毎年「挑戦」することを決めて、職員と一緒に頑張ってきました。そして、退職後も総合教育支援センターの開設に係り、学校や子どもたちをバックアップできる仕事をさせていたいただき、充実した日々を過ごしています。

現職の校長先生方、変化の激しい時代での学校経営、難しい局面も多々あると思います。しかし、挑戦している間は、失敗はありません。ご自身の積み上げてきた力を信じて、「挑戦」してください。

今、振り返ると



前・古河市立
古河第二小学校校長
尾花 潔

今年度は、定年延長の初年ではありましたが、昨年度末で役職定年ということもあり、とりあえず一区切りをつけたかった。ので、三月に退職をしました。特にやりたいことや特別なスキルがあったわけではないので、四月から、初任者指導教員として四人の新採の先生方を担当し

ています。四人とも誠実で、仕事に対して意欲の高い先生方です。

私が校長であった四年間のうち前半の二年間は、まさにコロナ禍でした。その対応の難しさに日々頭を悩ませていましたが、今思い返せば、結果的に「ピンチをチャンスに」が実現できていたと思います。児童と先生方の健康を一番に考えながら、行事の根本的な見直しは、児童の授業確保・改善や教員の働き方改革にある程度結びつくことができました。

また、この四年間心がけていたことは、常に「穏やか」でいることでした。職員のコンプライアンス違反や不審者の侵入等、難しい場面もありましたが、自分なりにリセットをして「穏やか」を持続するように努力してきました。

多くの方々に支えられた三八年間には、「感謝」の言葉しかありません。

思いを言葉に乗せて



前・結城市立
結城中学校校長
渡辺 信之

今まで「先生方に支えられて」という言葉を多くの先輩方からお聞きしてきた。「その時」が、いざ自分に降りてくると確かに

この言葉しか思い浮かばない。修学旅行で、京都のお寺と一緒に歩いていた生徒がこんなことを言ってくれた。

「校長先生のお話って、心に刺さるんです。」

校長の立場で、子どもたちに話をする機会がたくさんあった。言葉を選び、整え、伝え方を考えた。話の内容は、その季節行事に関するものが多かったが、先生方の子どものための思いの深さであったり、上級生の大きな存在であったり、お互いになかなか表現できないことを校長の言葉として伝えようと努めた。そんな思いからか、この言葉は、とてもうれしい言葉だった。

退職間近の三月、子どもたちが私の卒業式を開いてくれた。一人一人の子どものたちからメッセージをいただいた。一枚一枚の小さなカードには、都度の話が届いていたことが書かれていた。

見えないことを言葉にすること、なかなか伝えられないことを言葉にして伝えること、校長の大切な役割の一つだと思ってきた。

そう思えることも、すべて先生方、子どもたちのお陰。ありがとうございます。

ひばり



電車ごっこ
神栖・深芝小／宮澤 和弘

たくさんの方々の支えに感謝

那珂・舟石川小
増 次男

二〇数年前のある日の出来事。ある中学校に三年担任として赴任した四月。クラスの男子一名が私のところに来て一言。「先生って、人によって対応が違いますよね。何ですか？」。「ん？」「当然だろ！一人一人違うんだから対応が違うのは当たり前だよ。」と私から一言。この出来事から数日後、家庭訪問でこの生徒の母親から「これまでの先生だったならそんなことないよ、と言って終わるんだけど、本当に予想外。今度の先生は信用できそうだよ。と言ってうれしそうに本人が話してました。」とのこと。当時、様々な問題が頻発する中、苦労の日々であったが、自

分の考えを受け止めてくれたこの子どもと親の存在が大きな励みになった。
その後も多くの課題に対し子ども・保護者・地域、そして同僚等に支えてもらいながら何とか三〇数年。今改めて「先生」という職で頑張っていることができたことを誇りに思い、これまでに支えてくれた多くの方々に感謝したい。

初詣

久慈・大子西中
澤畑 孝也

私の趣味のひとつに神社仏閣巡りがある。引退したら四国八十八箇所を巡ろうと画策していたが、定年延長となり先延ばしとなってしまう。
小説家の大村あつしさんは、「神社とはお願いをしに行くところではなく、お礼を言いに行くところだよ。」と言っている。神社仏閣に参詣するときは、とかくお願い事のために参詣しがちだが、本来、神社やお寺は願い事を叶えてくれる場所ではない。それは、参詣の本来の目的をはき違えている。参詣の目的は、毎日の感謝を伝えることだ、というのです。

「今年も良い年でありますように。」とお願ひはしても、「昨年は良い年になりました。どうもありがとうございます。」とは言わない。自分が困ったときにはお願い事をするけれど、願いが叶ったら知らぬふりなんでは、考えてみれば神仏に対して何と失礼な話だろう。今度の初詣には「いつも見守っていただきありがとうございます。」とお礼を述べることにしよう。やは

り、私たちは常に感謝の気持ちで忘れないことが大切なのだと思ふ。

地域と共にある学校

日立・塙山小
川崎 博文

本校は、日立市のほぼ中央部に位置し、校地は、山側を住宅地として造成した高台の下にあり、日立製作所国分工場塙山住宅跡地である。古くから住む住民と団地造成により移ってきた住民が協力して、新しい町づくりに取り組んできた。そのため、地域との結びつきが強く、地域と連携・協働して教育活動を推進している。
本校では、地域学校協働活動推進委員会が中心となり、書き指導、読み聞かせ、クラブ活動（手芸・野外活動）、社会、総合的な学習の時間等、さまざまな学習支援があり、子供たちも地域人たちの学習を楽しみにしている。

また、本校では、毎年塙山学区すみよいまちをつくる会と共催で市関係課、消防、地域の防災士の協力のもと防災訓練を実施している。本年度は、煙体験、瓦礫避難、救助訓練、防災士による防災教室、バーベキュー、組立、ハイゼックス袋炊飯体験等、学年に応じて体験活動を行い、災害時の命を守る行動や備え、協力体制が欠かせないことを再確認した。
これからも、郷土を愛する児童を、地域と共に育てていきたい。



教員不足の中で

神栖・神栖一中
中田 信二

全国的な教員不足であり、志願者も減る一方です。高知県で小学校採用者の七割辞退という記事も、その一端を物語っているかと思ひます。
その背景や要因はさまざまかと思ひますが、今まで講師で補ってきた人材が新規採用となり、また、そもそも講師登録者自体も減るなど、講師不足も「教員不足」に拍車を掛けています。とにかく教員がいらない。どの学校も深刻な状況かと思ひます。

現下、それぞれの学校はよく頑張っているかと思ひます。山積する教育課題に背を向けず、児童生徒に真に寄り添い、成長に寄り添うべく心を砕いているかと思ひます。
報われようが報われまいが、周りからの評価を得ようが得まいが、児童生徒にとって自分にとって、意味あることに取り組んでいることに充実感を見いだし、そして喜びを感じる。

このような無心で児童生徒に向き合う多くの先生方が、今の学校を支えているかと思ひます。

つながりが育むもの

守谷・高野小
桑原 千恵子

今年度創立一五〇周年を迎えた本校では様々な記念行事が行われた。これらの成功のためには、長期間、多くの方にご尽力いただいた。本校にお子さんが在籍していない方も子どもたちの学びの場にサポーターとして

必ず来てくださった。本校の子どもたちは、家庭・地域・学校の深い愛情に包まれ健やかに成長しているからこそ「自分は大丈夫」という自尊感情が育まれているかと思ひます。さて、私自身はコロナ禍を経て、懐かしい異職種の方々とは対面でお仕事する機会があった。人間は触覚や嗅覚、味覚など「共有できないはずの感覚」が信頼関係をつくるという人類学者の山極壽一氏の言葉から、人間は五感をつかって他者を信頼する生き物であると再認識した。今般、オンラインは日常の一部だが、直接つながることは、様々な価値に触れつつ共感し、自身の価値を自覚させ、自尊感情を高め、信頼関係の構築に重要な役割をすると思う。一仕事後には、新たな気付きやつながりもでき、前向きな気持ちになった。VUCAの時代だからこそ、つながりを大切にしたい教育を行っていきたい。

教師冥利

稲敷・あずま北小
鴻巣 伸二

長く教師をしていると、「教師冥利に尽きる」と感じた経験が誰でもあるかと思ふ。最近の例では、先日、ある若者が「先生お久しぶりです」と挨拶に来た。十数年前に担任した報告に来たのだ。「試験大変だったろう。」と尋ねると、「勉強の楽しさを教えてくれたのは先生です。お礼がしたくて来たんです。」と言う。

また、ある日の買い物中、若い女性が挨拶をしてきた。中学校の柔道部の教え子である。柔

道の強い子だったが、ある理由で高校では柔道をやる決心でいた。私が説得したところ、彼女は高校でも柔道を続け、最後の県大会で優勝して全国大会に出場した。「先生がいなかったら、今の自分はありません。本当に感謝しています」と笑顔で話してくれた。

たいした指導力もない私だったが、まさに「教師冥利に尽きる」出来事だった。私の方こそ、子どもたちと出会い、その成長の一端に関われたことに感謝している。私も今年で役職定年を迎える。周囲への感謝の気持ちを大切にして最後の勤務を全うしたい。

閉校とともに旅立つ春へ

常総・鬼怒中
星野 美千代

創立五〇周年を迎えた今年度、本校は輝かしい歴史の幕を閉じます。地域の皆様に愛され、これまで勤務された先生方、ここを巣立った四五〇九名の生徒が創りあげてきた伝統を受け継ぎ、その襷をかけてゴールに向かって懸命に走っている心持です。「すべては子供たちの輝く笑顔のために」との思いを胸に、教職員とともにアンカーとしての役割を果たしたいと日々過ごしてまいりました。

最後の卒業生となる三年生一八名も、全力で頑張ってきました。特に、最後となる学校行事は、感謝の気持ちを込めて、本校に縁のある方々も楽しめるよう趣向を凝らした企画を考え、協力して取り組みました。校庭いっぱい笑顔がはじけ、一緒に汗を流した体育祭。オリジナ

ル学級歌を創作し、「笑顔でありがとう いつかまた会おう」と、自信をもって披露した合唱祭。きつと、多くの皆様の心に残る一日になったことでしょう。

「鬼怒中 誇りあれ」と、旅立つ春は、もうすぐです。

思い出のベランダ

筑西・下館小
萩野谷 匡

学校に到着し、車から降りると毎朝無意識に見上げる場所。それは四階のベランダ…。

私は新採から一五年間中学校に勤務した後、小学校に異動し六年生を担当しました。ある日やんちゃなAに対して厳しく指導し、フオローもせずに下校させてしまった事がありました。帰宅後、私は自身の指導を深く後悔し、Aが翌日登校してくる

不安になりました。

翌朝、焦る気持ちでハンドルの握り、駐車場に到着して車から降りると、四階教室のベランダから大きな声が響きました。

「は〜ぎの〜やせ〜んせ〜」見上げると、Aが満面の笑みを浮かべ両手を大きく振っていたのです。安堵すると同時に私も「A、おはよう！」と大声で応え、思い切り手を振りました。

この出来事は、その後の子どもたちへのかかわり方を考え直す大きなターニングポイントとなりました。Aに感謝していただきます。

二〇数年前にAと出会い、自分を変えてくれた下館小学校。この学校に再び勤務し、退職を迎えられることに幸せを感じます。

図書案内

カモメになったペンギン

著者 ジョン・P・コッター

マネジメント力とリーダーシップ

図書案内の原稿依頼を引き受けて「どんな本を紹介すれば？」となった。普段から本は読む。多読・速読な方であると思う。しかし、校長先生方に紹介できるように本は…。というわけで、ネット検索してみた。キーワードは、「リーダーシップ」「学校」。そして、ヒットした本たちの中の一冊がこの本である。

この本を選んだ理由の一つは訳者の藤原和博氏だ。都内初の民間人校長「義務教育学校」となった方である。訳者あとがきの最後に「この本は、あなたに、その偉大な一歩を踏み出させてくれるバイブルである。」とある。著者のコッター氏はリーダーシップ論・組織改革論の権威。

何より四〇五分あれば読み終わると著者が言っている。これなら先生方に気軽に手に取ってもらえるのでは、合わせてこれから読む私にも負担が少ないのでは…。

著者が「寓話」だというくらいなので、ストーリーは単純明快。ある氷山にペンギンたちが住んでいて、一羽の好奇心旺盛なペンギンが氷山に崩壊の危機が迫っていることに気付いたことから始まる。発見者フレッドは、周りのペンギンに説明するが、そんなことが起こるわけないと、相手にされない。ペンギンのコロニーには党首ペンギン十羽で形成されるリーダー議会がある。発見者フレッドは、その中の一羽アリスに相談する。

ペンギンが氷山に崩壊の危機が迫っていることに気付いたことから始まる。発見者フレッドは、周りのペンギンに説明するが、そんなことが起こるわけないと、相手にされない。ペンギンのコロニーには党首ペンギン十羽で形成されるリーダー議会がある。発見者フレッドは、その中の一羽アリスに相談する。

リーダーたちの中でも実践的で実行力があるアリスが危機感を共有できたところから、危機回避のための行動はスタートする。

てる。

四 変革のビジョンを周知徹底する。

五 行動しやすい環境を整える。

六 短期的な成果を生む。

七 さらに変革を進める。

八 新しいやり方を文化として根付かせる。

ペンギンたちのコロニーは危機を脱する。そこに至るまでの五羽のマネジメント力とリーダーシップがすばらしい。コッター氏は「マネジメントとは平時における組織コントロールを効率的に実践する手法であり、リーダーシップはマネジメントでは対応できない非常時に変革を成し遂げる力である。」と言う。（コッター著『リーダーシップ論』より）ペンギンたちにはリーダーシップを発揮できる不断のマネジメントがあり、リーダーシップをとれるリーダーがいた。振り返って自分はどうだろうか。この本を読み返しながら、考えていきたいと思う。

最後に、題名の「カモメになつたペンギン」に疑問をもたれた方のために。読み進めれば自明なのだが、原題は「Our Iceberg Is Melting」 ぼくらの氷山が溶けちゃうよ。である。原題のままではよかったのにと感じるのは私だけだろうか。

坂東・弓馬田小

坂本 悦子

一 危機意識を高める。

二 変革推進チームを作る。

三 変革のビジョンと戦略を立

市町村教育委員会と学校長会

西 県

古河市教育委員会 との連携

古河・下野小
助川 典子

古河市学校長会は、小学校二・三校、中学校九校、計三二校で構成され、本会令和六年度の合言葉は、「携」（たずさえる 一緒に行動する）である。この合言葉には、各学校で校長がリーダーシップを発揮し、迷わず堂々と学校経営を進めていくという思いが込められており、「連携」をキーワードに本年度の古河市学校長会がスタートした。

古河市教育大綱の目標は、「人が育ち文化の息づく古河（まち）をつくる」であり、市教育委員会は、「子どもが主役の学校づくり」を重点目標に掲げている。月例の学校長連絡協議会では、教育長、教育部参事、指導課長より、市の教育的課題解決に向けた指導助言をいただき、学校長会として学校現場での対応方法を熟議し、共通理解を図っている。さらに、定期的に発行されている市教育委員会指導課だより「子どもが主役の授業へ」では、古河市内外の授業展開の好事例が紹介され、各校授業研究の一助となっている。また、古河市の教育の特徴に

は、各校の実情に合った市会計年度任用職員の弾力的な運用がある。古河市では「子どもが主役の学校づくり」を目標に、市の人材を生かした教育実践が展開されている。

【児童生徒一人一人の確かな学力を育む指導】

・児童生徒一人一人の習熟度に応じた学習サポートと個性の特性を生かした指導に向け、教育活動指導員が小・中学校に一・二名配置されている。指導員の協力により、児童生徒は学ぶ楽しさを体感している。

・理科支援員が小学校に配置され、実験及び観察等の理科教育充実に成果を発揮している。

【児童生徒一人一人を大切にした支援】

・教育上特別の支援を必要とする児童生徒の基本的な生活習慣の確立、介助や健康・安全確保に向け、本市では特別支援教育支援員が希望校に必要な人数配置されている。各校では、児童生徒の個性を生かした支援に全力で取り組んでいる。

その他、日本語指導員及び指導サポーター、学校図書館支援員、学生サポーター、学校の相談員等の助力により、各校では、「子どもが主役」の絶え間ない学校経営を推進している。

【学校課題解決に向けた今後の人材配置】

・本市では不登校やいじめにより学校生活に不安を抱えている生徒や保護者への支援に向け、来年度から校内教育支援センター指導員の配置が決定した。学校長会は現時点での学校の課題解決のために必要となる人材配置に向け、市教育委員会と話し合いを進めている。

今後市教育委員会と学校長会が古河市の教育の両輪となり連携し、児童生徒にとってより効果的で、有効な体制となるよう取り組んでいきたい。

中 央

東海村教育委員会 との連携

東海村・中丸小
木村 智恵

東海村の学校長会は、小学校六校、中学校二校の校長で構成されており、教育立村のビジョン「まちづくりは人づくり、人づくりは教育から」のもと、東海村教育振興基本計画の実現に向け、東海村教育委員会（以下、村教委）と連携を図りながら学校経営を行っている。毎月行われる学校長会研修会では、教育長、学校教育課長、指導室長が参加（必要に応じて、村役場の関係課長が参加）し、児童生徒の

健全な心と身体の育成に向け、協議を重ねている。村教委は、学校長会の意見や要望を村予算に反映するなど、学校の理解者であり、応援団になっている。

一 充実した人材配置

村教委が雇用している多様な人材が各学校に配置されている。スタディ・サポーター、学校図書館指導員、教科特別指導員（サイエンス、図工・美術、ICT）、スクールカウンセラー、生活指導員、低学年支援員などは、児童生徒の学習や生活の支援を行っている。教育指導員は、主に採用一年から三年の教員の授業を参観し、指導力向上のための助言や相談を行い、若手教員を支えている。このような多様な人材配置により、児童生徒一人一人へ、きめ細やかな支援を行うことや質の高い教育の提供が可能となっている。また、村立図書館と学校図書館指導員の連携により、読書に親しむ児童生徒が増加するなど、豊かな心の育成が図られている。村雇用教職員の質については、村教委の定期的な研修により、保証されている。

二 学校教育と社会教育の連携

生涯学習課が運営する令和三年七月に開館した『東海村歴史と未来の交流館』（以下、交流館）を拠点に、学校教育と社会教育を融合した自然体験活動や歴史体験活動が展開されている。交流館の学芸員や理科活動専門員による「出前授業」や九年間を通して東海村について学ぶ「とかいっ子プラン」は、児童生徒が、東海村の魅力を発見し、郷土愛を育むのに役立っている。

「逝去を悼む」



令和七年一月十四日、七会小学校長、小林英典先生が逝去されました。使命感にあふれ、児童・教職員・保護者・地域に愛情を注がれました。校長先生のご指導は一生忘れません。ここに哀悼の意を表すとともに、謹んで小林先生のご冥福をお祈りいたします。

編集後記

教師のなり手不足から、教師の質の維持向上という新たな課題が生まれ、人材育成が喫緊の課題となっています。近年、多様な問題を抱える子供が増え、対応など学校経営で苦慮されている中ですが、校長同士の連携によりこの荒波を乗り切っています。ましよう。

なお、年末年始のご多用の中、先輩の皆様をはじめ多くの方々から貴重な原稿をお寄せいただきました。深く感謝申し上げます。（中根）